士清翁と考古学

谷川士清の会顧問　三ツ村健吉

ここ数年士清の調査を進めていく中で、その著書に『勾玉考』という異色な存在を知り、興味が湧くまゝ触手を広げていくうちに、かなり考古学に傾倒していたことが解った。26頁ばかりの小著であるが、『倭訓栞』等と共にその原稿を反古塚に埋めたことから見て、翁にとって大事な著作であることを認識することができた。公開講座で二回にわたって御紹介を図ったが骨こしい漢文体で古代の祭祀・服飾等に疎い私には難しく、熱心に聴講して下さった方々には隔靴掻痒の思いをお与えしたものと恐縮している。

翁の考古学は当時流行した弄石趣味を超えて、日本書紀や風土記の研究をより実証的に考証する意図が窺われるのである。『勾玉考』には付録として『石剣考』と『臼石考』があって翁の研究の幅を広げている。その当時奇石を愛でる風潮があり、翁の周辺にも富裕な階層の間にいわゆる弄石家がいて、翁がその核になっていたようだ。岡藤左衛門・赤尾元圭・俳人の菊池宗雨（二日坊）・福田正芳等が著名で、近江の人、木内石亭の『雲根志』二部十五冊の中に名を連ねている。大和国城上郡釜の口、山の辺道沿線にある長岳寺の長老泰春との交流も深く、三輪山に採集に出かけ、相互に情報を交換している。大阪の酒造家で文化人として高名な兼葭堂ともこの道を介して親しかったし、長子士逸が所払いになった後、屡々訪れている経緯もわかった。医療と研究著述で多忙を極めた士清の半面に、各地に奇石を求める意欲的な生きざまにふれて一段と畏敬の念を強くした。ちなみに県内では地元津・安濃・鈴鹿・一志辺りで採集したようで、翁の別宅のあった長岡で良質な瑪瑙を入手した記録もあり、五百野・渋見も翁を楽しませる採集地であったようだ。翁の名を高めた国語辞典『倭訓栞』の一つの特長と評価されている地名の考証の多いのも故なしとはしない。十分な御案内には程遠いものながらも、偉大な翁の一面を御理解頂く糧ともなれば幸甚です。

士清大賞・紀平真里さん（書道）ら
第２回ことすが書道・絵画コンクールの経過と結果

第１回ことすがコンクールは「書き初め」として発足したが、昨年度は八町の士清旧宅が下水道工事に伴う改装のため三月まで閉館。そこで、コンクールは冬休み前に募集し、２月25日締め切ったところ、書道395点・絵画108点という多数の応募があった。

書道は書家の長岡雅風さんと若林信香さん（この企画の実行委員長）、絵画は日展作家で四日市大学教授の谷岡経津子さん（当会顧問）が審査に当たった。

４月20日（土）10時から表彰式。作品の展示は４月20日～５月６日。全作品を旧宅全体に展示して賑わった。

上位入賞者は次の皆さん。

士清大賞〈書道子どもの部〉紀平真里（付属小～中１）　〈一般〉山脇たかみ（津市）
〈絵画子どもの部〉　高田想（河芸町）　〈一般〉内田雄亮（亀山市）

知事賞〈書道子どもの部〉塚田典子（南が丘小）、岡田智子（橋南中１）　〈一般〉稲垣　操（津市）
野村竜作（鳥羽市）
〈絵画子どもの部〉　森川芽詠（鈴鹿市）、西浦志帆（津市）　〈一般〉河合正勝（津市）

市長賞〈書道子どもの部〉寺嶋麻里、渋江一樹、小菅真奈、田中千裕、武村雄平
〈一般〉佐藤有美、葛西早苗、稲垣めぐみ、佐藤潤
〈絵画子どもの部〉井川あみ、駒田ほし美、森本麻未　〈一般〉仁上伸一、藤田昌久

平成14年度　研究部会の実施事項について

公開講座を３回実施しました。

1　平成14年６月22日（土）　演題「**勾玉考について**」　講師　三ツ村健吉先生
2　平成14年10月19日（土）　演題「**勾玉考　その２**」　講師　三ツ村健吉先生
3　平成14年12月14日（土）　演題「**谷川士清と本居宣長**－書簡をとおして－」講師　三ツ村健吉先生